



喜多村筠庭

嬉遊笑覽

1

(卷一〜卷二)

別卷 7

日本隨筆大成

吉川弘文館

日本随筆大成 別卷

昭和三年四月十日発行

編纂者

日本随筆大成編輯部

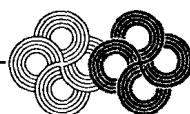
代表 早川純三郎

発行者

桜井庄吉

発行所

日本随筆大成刊行会



日本随筆大成 別卷

嬉遊笑覧 1

昭和五十四年二月八日 印刷

昭和五十四年二月十五日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所

株式会社

吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号

電話東京八一三一九一五（代表）

振替口座東京〇一一四四番

製作

株式会社

たんちょう社

解題

嬉遊笑覧 十二卷 附録一卷

喜多村筠庭きたむらたけ編著

別巻の7、10は、嬉遊笑覧十二巻、附録一卷を分冊して刊行する。その編成は、7巻一、二、8巻三、五、9巻六、九、10巻十、十二・附録一卷である。

本書の嬉遊笑覧は、喜多村筠庭が和漢を問わず博搜広求して、その該博なる知識を余すところなく筆録し編輯した、分類体の事典で、江戸時代の風俗を知るうえに、欠くことの出来ないものである。

文政十三年庚寅冬十月の漢文自序があり、その総目は、巻一 居処・容儀、巻二 服飾・器用、巻三 書画・詩歌、巻四 武事・雜伎、巻五 宴会・歌舞、巻六 音曲・翫弄、巻七 行遊・祭祀・仏会、巻八 慶賀・忌諱・方術、巻九 娼妓・言語、巻十 飲食・火燭、巻十一 商賈・乞士・化子、巻十二 禽虫・漁獵・草木の全十二巻、附録一卷とからなっている。

巻一のはじめに、「古書をもて徴とするをいとひて、別に一種の学を立るものあり、杜撰といふべしといへり、げに物によらではえあるまじきわざになむ」と述べているので、その志が窺われるのであるが、平生「耳底記」にいうところの「学問は乞食袋のごとし、何もかも取入れて、さて其後にえらむなり」の語を尊重して、又群書の索引をも作って座右に置くことをしたという、博覧家

筠庭の然らしむ結果が、本書を生むに臻ったのであろう。しかし本書には、喜田川季荘の守貞漫稿のごとき、挿絵のないのが遺憾に思われる。

本書は、明治十五年の我自刊我書によつてはじめて活字化せられ、以後存採叢書(明治三十六年)、日本藝林叢書(昭和二年)、日本隨筆大成(同四年)に収録されている。それら活字本のうちでは、日本藝林叢書本が他本と比較して異同が太だしく、本書の存在価値を認められる。同書解題によると、大槻文彦蔵写本をもつて底本とした由が記されている。大槻氏旧蔵本はいま慶応義塾大学の蔵するところである。他の活字本については、その使用せられた本の記述がないので判らないでいる。

ここで写本等について述べなければならぬのであるが、いまだそれらを精査するに臻らない状態なので、言説を注意しなければならぬが、静嘉堂文庫に蔵せられる二本のうち一本は、筠庭自筆本(巻一を欠く)である。いま一本は石橋真国写本である。この石橋真国本に類似する写本が、内閣文庫に蔵せられる「明治十三年購求」の印の押捺される写本であり、先の大槻氏旧蔵本であり、都立中央図書館蔵の安藤正次氏旧蔵本(巻五を欠く)である。内閣文庫には前記写本の他に、いま一本、「銀座第三街本二十二号地」の印のある写本が存する。自筆本は静嘉堂に存するのであるが、東洋文庫に蔵棄されるものも、筠庭の筆とみて間違いなからうと思われる。しかし同書も、巻二上、巻十二、附録一卷が欠けている。静嘉堂自筆本とは未だ比較をするに臻らないので、その性質は明らかに出来ない。

自筆本について一言を附すれば、国会図書館所蔵の筠庭雜録の自筆本の「名古曾の関」については、「此条コレニテハ具ハラズ、嬉遊笑覧附録ニイヘリ」とある。しかるに静嘉堂自筆本附録には

見当らない。が、石橋真国本をはじめ、同本に類似する写本には、それが存するのである。この一事は、嬉遊笑覧の成立を考えるうえに注意せられよう。

以上の写本の他に、宮内庁書陵部、京都大学にも所蔵される由であるが、それはまだ読んでいない。しかし本書は、近世の庶民生活を知るうえには、誠に有難い本なのであるから、静嘉堂自筆本と諸本との関係を明らかにして、底本をつくりたいものである。

喜多村筠庭の略伝は、大成第二期第四巻の画証録の解題に、故丸山季夫翁の一文があるのであるが、ここには世田谷区烏山町の幸龍寺に存する墓碑銘を録して置く。

筠庭喜多村君、諱信節、字長岐、称彦兵衛、筠庭其号也、君為人間靖好書、不慕榮利、博聞而強記、諸子百家涉覽而取舍之、尤好考証之学又能書画、旁及詩藻、所著有瓦礫雜考、嬉遊笑覧、筠庭偶筆若干卷、安政三年春罹病、既而荏苒以其六月二十三日卒、距天明三年十月十六日之生、壽適七十四歲矣、嗚呼隱士若君者、不易多得也、

以上に補足していえば、名は信節のぶふしまた節信といい、その号である筠庭のぶにわは、その居の庭にあった竹叢に由来している。その人物は、「狷介な、かなり辛辣な、つむじ曲りの、容易に人を許さない、白眼他を見るといつた型の人ではなかったらうか」と、森銃三先生はいつて居られる。筠庭の研究は、一向に進まない状態であるが、その交友の広がったことよりして、今後の新資料の発見を俟つて明らかにしたいものである。都立中央図書館に所蔵される、山崎美成の夜談録（自筆）のなかには、筠庭が石坂竿斎に同道して、シーボルトに会いに行ったことがみえていることなど、珍しいものであろう。碑文にみえる著作の他には、筠庭雜考、筠庭雜録、過眼録、画証録、きくのまに／＼

解題

四

等が伝えられて居り、自筆のものが多く遺存している。なお瓦礫雜考は、筠庭の著述のうち木版本の唯一に存するものである。

(小出)

嬉游笑覽

嬉遊笑覽序

人之稟質雖各異、心志和乃樂、樂乃笑、猷笑以諸戲、嗚呼飽食無所用、心難矣哉、夫四海之內、一州則有一州之俗、一鄉則有一鄉之習、勿論於歲時節物、於凡百伎芸、亦自有小異而節物伎芸、更各有戲事、是故詩人藻客、取戲于文、勇士壯夫、致諱于武、或較優劣、或爭輸贏、上自掖庭宴游、縉紳風流、下迄閭閻社會、小兒囉咤、要之均是戲事、而所娛樂以遣興者一也、況方今熙朝無事之時、逸民皆無不含舖而嬉、鼓腹而遊者、若夫善戲諱不為虐、則足以觀太平之余樂、迺此編諧談敖弄、雖近為虐之言、然亦將慰賢乎己之歎云爾、

文政十三年庚寅冬十月

筠庭 信節

おのれ信節のぶよまたの名節せつしん信ともいふは、もろこしの潜夫論を著しゝ人を学ぶにもあらず、又井出の蛙のからしたるをもちたりし数寄者すきものをしたふにもあらで、いと等閑なる人わらへならむかし。さるはゆかりある人の金かなもの巧みに作れるが我に贈とらするとして銅印を刻きざめるに、文字をうへしたかへさまに居すまたれば改めつくらんといひしかど、殊さらに作り出たる物のあたらしくをしければせちにこひてそのまゝに用ひたるは、行成卿のみづからなりゆきとかゝれしも思ひ出られぬ。また筠庭たかにばといふことは住る処の庭の傍にむら竹のいさゝか生たるを、すなほなる心を学ぶ友なれや文みる窓になびく呉竹とくちずさみて、もしさるべき処もとめて文みるためにはなちいでの一間をも設けたらましかば、これをそのかたへに移し植うゑなましと、まづあらましに号をつけむもをこがましきわざなれど、今は世人のならひなれば、やがて竹庭とぞいひける。文字をしも漢めかさむとて筠庭、また筠居とも書るになん。幼いよきよりよろづに拙つたなうしてたゞ物よむことのみすこし好みて、有にまかせて見しうちにはふと心づきて思ひ得ることなどもある折々に、書籍に乏としければ考ふべきこともあたはず、いかでこれ多く集めてしがな、さりとてことひ牛に汗あゆまでひかせ文庫ふくらの棟木むねぎへさゝへん程ならんは見つくすべうも覚えねば、たゞおほよそにもあつかふゝみどものよめがたきは、異本を得てよく校へ合せてもたらば事足りぬべしなどおもひしも力及ばざるをいかゞはせん、わが家にむかしより貯ふる物としては古き書画器物のみ、今の身の程にはこよなう過たる物どもゝ有しを、もてあそぶこともなく用ゐることもせでひめ置ぬるはいとやくなき物から、かく伝へぬるをいさゝかも我好む事に

かへむは本意ならねせんすべなくて、蟻といふ虫の土をまろかせて塔婆くむとかいふめることわざのごと、物つみて其料にせむにはしかじと思ひ、かまへて年経るにいとふいなる事のみさしつどひて心ざしゝ事もいたづらに成つゝ、かの塵ばかりもはふらさじとせし物までもおもはずに名残なくうせぬるは、さるべき時にやありけむといと浅まし。かゝるまぎれにすこしばかりもたりしふみさへ半ばにたらずなりぬるはいかにかせまし、今はいよゝちからも尽て文みる事もゝのうくて、心にそまねばしは手だにふれざりしかど、年ごろ抄書ねきがきしつる反古ども散みだれたるがしみの巢すとならむは、さすがなる心ちせられて捨もやらず、まさぐりみればいとをかしきことどもゝまじれるに、心なぐさみぬるは童のたはふれになん似たりける、これにておもふに、世にもてあつかふことわざしげ繁く、また人の好みもまち／＼にはあんなれど、おほくはこの戯れ遊びにひとし、いでやこの反古どもを種たねとして、其中にわきて遊興の事のはかなくをさなき又はおほどけさるがうがましきなどかいつめてみばやと、やがてかく物するに、なほをち／＼にのどめてかへさひ檢ふべき書もおほかれど、おほらかにかいやりて勤めてあなぐり求るも勞がはしく、かつは心ゆくまで正さむとせばいくばくのいとまか費えはてしなからむもわづらはしければ、ひき／＼に休ぬるにこそ、かくて後ゆるやかに見出たる事あらんついで／＼に書くはへなむかし。

ものうさにまなびし道はふみもみずひまゆく駒のをしき物から

總目

卷一	居處	容儀	○上下二卷
卷二	服飾	器用	○上下二卷
卷三	書画	詩歌	○上中下三卷
卷四	武事	雜伎	
卷五	宴會	歌	
卷六	音曲	翫舞	○上下二卷
卷七	行遊	祀會	
卷八	慶賀	忌會	
卷九	娼妓	言術	
卷十	飲食	火燭	○上下二卷
卷十一	商賈	乞	
卷十二	禽虫	漁	
右總計十二卷附錄一卷			

卷上
居所

[illegible]

厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	厶	
台目	座敷	高麗縁	ござ	深縁差延	石だゝみ	かもしとね	畳	ねだ	板じき	盗竹	あぐら	くれとこ	床（在前）	置床	間木	棚	押板

垣 切 部 ツ 局 く 天 土 帳 納 別 納 塗 居 額 裏 真
 さ 切 部 ツ 局 く 天 土 帳 納 別 納 塗 居 額 裏 真
 ん か 屋 ボ 局 み 井 蔵 台 屋 納 戸 籠 間 突 居 飾
 ら け 屋 ボ 局 み 井 蔵 台 屋 納 戸 籠 間 突 居 飾
 ご け 屋 ボ 局 み 井 蔵 台 屋 納 戸 籠 間 突 居 飾

嬉遊笑覧 目次

穴 穴 宅 宅 突 突 突 空 空 空 空 空 空 空 空 空 空 空
 釘 か 猿 か し ひ や 杉 衾 唐 障 方 板 堅 隔 蔀 駒 鱧
 かく す 戸 き ざ の り 障 障 障 立 屏 蔀 子 よ 板
 し ひ だ の た く み

五 五 四 四 四 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 充 充

狐 戸
狐 格 子
京 格 子
江 市 屋 格 子
釘 貫
忍 び 返 し
朝 鮮 矢 来
も が り
さ か も ぎ
し ゅ が き
放 出
め だ う
縁 が は
入 側
馬 道
め を 見 る
馬 頭
屋 根

[illegible]

八八 八八 八八 八七 八七 八六 八六 八六 八六 八五 八五 八五 八五 八四 八四 八四